

目的 消化器系である腸管は、構造と機能により小腸と大腸に区別されている。その中で、小腸上部に多く認められている Paneth cell (以下は、P.C と略) は、形態学と生化学・生理学および免疫学などの多方面の視野から論じられている。それらの事実から種々諸説が提示されている。しかし、形態および機能については、いまだ明確に定義されていない。本実験では、小腸における P.C の存在を再確認することと各種の染色を施行し比較を行なった。また、十二指腸の P.C の発生がどの時期に形成され得るものかをも検討し、若干の知見を得たので報告する。

材料と方法 実験に供試した材料は、雄 Rabbit (日本白色種) 3羽を用いた。Rabbit の腹腔を開腹、腹腔臓器を全摘出した。その摘出臓器を 10%ホルマリンに浸漬し、十二指腸・小腸部および結腸の各々の部分を切り出した。染色の種類は、Orange G 染色 (以下は、O.G と略) をおもに、Hematoxylin・Eosin 染色、Masson の変法および杯細胞を確認するための対照染色として PAS 反応 (Periodic Acid Schiff reaction) を実施した。また、媒染液を用いて各々の染色性の相違を確認した。

結果 P.C は、特定の動物の大腸にも存在するといわれるが、通常は小腸に存在するものである。本実験の観察では、小腸と大腸の境界部 とくに大腸側に P.C の存在が認められた。また、O.G において、媒染液の浸す時間経過をみると 30 分間程度が、P.C の顆粒をよく染めだしていた。O.G 液を酸性域と塩基性域にそれぞれ P.C を染めると、pH 3.0 の強酸性域で明瞭に染めだされていた。腸の P.C の発生時期については、なお検討する必要性がある。